一六、七世紀におけるスペインの新世界貿易とフランス

服部春彦

【要約】 一六―一八世紀のスペイン本国＝アメリカ植民地間貿易に占める麻織物の決定的重要性、また麻織物の大生産国たるフランスがこの貿易分野で卓越した役割を演じた事実は、同時代人の多くの証言や今日の諸外国の研究がこれを指摘しているにもかかわらず、近世国際貿易におけるイギリス毛織物の意義を一面的に強調するわが国の学界ではほとんど無視されている。本稿では一六、七世紀におけるスペイン新世界貿易の展開に対して、フランス人とその商品がいかなる役割を果したかについて改めて検討を加えてみた。その結果、一六世紀中葉―一七世紀初頭の新世界貿易の飛躍的成長期にスペイン本国経由でフランス麻織物のアメリカ向け輸出がめざましい伸びを示したこと、また一七世紀前半のスペイン新世界貿易の収縮期にはフランスの輸出は大幅な減少を蒙ったとはいえ、一六六〇年以降の新世界貿易の回復期にはフランスが再びスペイン領アメリカに対する繊維製品の最大の供給者となったこと、を確認することができた。

史林 六六巻六号 一九八三年一一月

はじめに

本稿は一六、七世紀におけるフランスの対スペイン貿易の展開過程を、同じ時期のスペインの新世界貿易の発展と関連づけながら考察しようとするものである。周知のように、一五世紀末葉コロンブスの西インド諸島発見にはじまったスペインによる新世界の征服と植民は、一六世紀の前半から中葉にかけて急激な進展をみせ、それとともにスペイン本国＝植民地間の貿易がめざましい拡大をとげた。そしてスペインから新世界へ輸出された商品の中では、一六世紀半ば以降各種

の工業生産物、とりわけ繊維製品が支配的となったが、スペインはその国内の生産物のみによっては植民地の急増する需要をみたすことができず、そのためスペイン以外のヨーロッパ諸国の工業生産物がスペイン本国を経由しつつ、時とともにますます大量に新世界へと輸出されるにいたったのである。[1]

それではこのようにスペイン本国経由で新世界へ工業生産物を供給したヨーロッパ諸国の中で、フランスはどのような地位を占めていたのであろうか。この点についてわが国での通説的見解は、スペイン領植民地向け輸出商品の基軸が毛織物にあったとみる立場から、毛織物の生産力にまさるイギリスとオランダがこの分野で急速に支配的地位を占め、毛織物の輸出能力を欠くフランスは両国のはるか後塵を拝していたとみなしている。[2] この見解によれば、フランスがスペイン領アメリカ貿易においてイギリス、オランダの真におそるべき競争者となるのは、コルベールの強力な育成政策によって輸出向け毛織物の生産が確立をみた一七世紀末葉以降のこととされるのである。

これに対してフランスやスペインの歴史家の間では、今日一般につぎのように考えられている。すなわち、スペイン領アメリカ向け輸出商品としては毛織物よりも麻織物の方がはるかに重要であり、この麻織物のヨーロッパにおける最大の生産国であったフランスが一六世紀中葉以降、一七、八世紀を通じてスペイン本国からそのアメリカ植民地へ輸出される工業生産物の最大部分を供給したというのである。[3] このような見方はなお綿密な実証的裏づけをもって主張されているとはいいがたいが、近世の国際貿易に占める毛織物の意義を一面的に強調しがちなわが国の西洋経済史学界においてはほとんど無視されているといってよい。筆者はさきに本誌所載の別稿[4]において、一七世紀末葉から一八世期中葉にいたる時期についてスペイン本国＝アメリカ植民地間貿易に占めるフランスの圧倒的優位を確認したが、本稿ではさらに時代をさかのぼり、一六世紀前半から一七世紀後半にいたるスペイン新世界貿易の発展に対してフランス人とその商品がどのようにかかわって行ったか[5]を跡づけてみることにしたい。このような主題についてはフランスやスペインにおいても未だ体系的包括的な研究がなされていないため、以下の考察もきわめて大づかみな粗描にとどまらざるをえないが、最近までの個別

研究の諸成果と若干の史料とに依拠しつつ、スペイン領アメリカ貿易に占めるフランスの相対的地位をできる限り明確にして行きたいと考える。

① C. H. Haring, *Trade and Navigation between Spain and the Indies in the Time of the Hapsburgs*, 1918, p. 113; I. Wallerstein, *The Modern World-System II: Mercantilism and the Consolidation of the European World-Economy, 1600-1750*, 1980, pp. 181-185; 近藤仁之「スペイン経済の盛衰」（角山栄他編『講座西洋経済史』第一巻、同文舘、一九七九年、所収）、一三〇—一三一頁、等を参照。

② 大塚久雄『近代欧洲経済史序説』（初版一九四四年、『大塚久雄著作集』第二巻、岩波書店、一九六九年、所収）によって確立されたこのような見方は、現在でも基本的に踏襲されているといってよい。

③ たとえば、F. Braudel et E. Labrousse, éd., *Histoire économique et sociale de la France*, t. I, 1977, pp. 1007-1008; P. Léon, éd., *Histoire économique et sociale du monde*, t. III, 1978, p. 73; E. Lorenzo Sanz, *Comercio de España con América en la época de Felipe II*, 2 tomos, 1979-80, t. I, pp. 427, 445. 参照。

④ 服部「一八世紀のスペイン＝アメリカ貿易とフランス」（『史林』六三巻二号、一九八〇年）。

⑤ 周知のようにスペインの法律は外国人がアメリカ貿易に従事することを禁止していたので、フランス人がその商品をスペイン領植民地へ輸出するためには、つぎのいずれかの方法に頼らねばならなかった。その第一はスペイン国籍を取得する方法であり、そのためにはスペインに一〇年間（一六〇八年以後は二〇年間）、不動産を所有しつつ居住し、かつスペイン人女性と結婚することが条件とされた。もっとも、中には右の条件をみたしていなくても一定金額の支払いにより帰化免状を与えられた者がいたが、しかしアメリカ貿易のためにこの免状を取得したフランス人は一五九八—一六三四年について二二人を数えるにすぎない。つぎに第二の方法は母国商人の代理業者としてアンダルシーア諸港に定住するフランス商人が、友人のスペイン人を自己の商品の名義上の所有者とした上で、別のスペイン人委託商を通してそのアメリカへの輸出を行なうものである。この種の非合法貿易は一六世紀後半から行なわれていたが、とくに一六六〇年以後盛行をみたといわれる。しかしこの方法では外国商人は、スペインの港において高率の輸出入関税を支払わねばならないため、第三の方法として、税関を通さずにカディス湾内においてフランス船からスペインのアメリカ向け船団へ、またスペイン船団からフランス船へと直接商品の積み換えが行なわれた。一七世紀後半にスペイン政府がフランス国王に対しその禁圧を要求しつづけたのは、この後者の形態の密貿易である。以上については Cf. C. H. Haring, *op. cit.*, pp. 107-113; A. Girard, *Le commerce français à Séville et Cadix au temps des Habsbourg*, 1932, pp. 12-18, 166-181, 573-574; J. Lynch, *Spain under the Habsburgs*, 2 vol., 2nd Edition, 1981, vol. 2, pp. 184-185.

一　一六世紀のスペイン植民地貿易とフランス

一六世紀におけるスペイン領アメリカ植民地の形成・発展と並行して、スペイン本国と植民地との間の貿易がめざましい拡大をとげたことは、すでにE・J・ハミルトンやショーニュ夫妻の研究によって確認ずみの事柄である。ショーニュによれば、スペイン植民地貿易の指定港であったセビーリャとアメリカ植民地との間を航行した船舶の総トン数は、一五〇六―一〇年の合計一万五六八〇トンから一五四六―五〇年には九万五四六〇トンへと飛躍的に増加し、一五五六―六〇年にはいったん六万七七三三トンまで後退したものの、一五六五年頃から再び急増をつづけて一六〇六―一〇年には二七万三五六〇トンを記録するにいたった。[1] 新世界貿易に従事するスペインの船腹量は一六世紀初頭から一七世紀初頭にいたる間に実に一七倍もの増加をとげたのである。このような新世界貿易の飛躍的拡大は、ハミルトンが提出したアメリカからの貴金属流入量のデータによっても裏づけられる。スペインへの貴金属の流入量は一五三〇年代から急増しはじめたが、とくに一五六〇年以降ペルーのポトシ、メキシコのサカテーカス、グアナファート各銀山の採掘が本格化するとともに激増を示し、一五九〇年代にそのピークに達したのである。[2]

さて、このようにスペイン本国＝アメリカ植民地間貿易が一六世紀を通じてめざましい拡大をつづけたとするならば、それはフランスとスペイン本国との間の貿易にどのような影響を及ぼしたであろうか。

A・ジラールによれば、フランス＝スペイン貿易の起源はきわめて古いが、とくに一三、四世紀からブルターニュ、ノルマンディーなどフランスの沿海諸州とスペイン北部のビスカーヤ湾岸地域との間に海上貿易の著しい発展がみられ、フランスから麻織物・毛織物等の繊維製品を筆頭に金物・小麦・魚類等がスペインへ輸出される一方、スペインからは羊毛・鉄・銅・皮革・蠟等の原料品と各種の果物・油・ぶどう酒がフランスへ輸入された。[3] また一五世紀末以前には、フランス＝スペイン間の貿易は主にスペイン商人の手によって行なわれ、フランス側の貿易拠点となったナントやルーアンには多

数のスペイン商人の定住がみられたのに対して、フランス商人がスペインへ貿易に赴く例は少なかった。[4] しかるに一六世紀に入るとともにフランス＝スペイン間の貿易には注目すべき変化が生じた。すなわち、スペインの対フランス貿易の拠点として南部のアンダルシーア諸港が北部諸港に代って急速に重要性を増し、またこれと並行して、貿易のためにスペイン諸港を訪れるフランスの商人および船舶が増加するにいたったのである。[5] もっとも、一五二一―五九年の、イタリアでの覇権をめぐる仏西間の戦争の時期には、フランスは対スペイン貿易のためにイギリスやフランドルの商人に頼らねばならなかったが、[6] 一五五九年のカトー＝カンブレジの講和ののちフランス＝スペイン貿易が躍進を開始するとともにスペイン、とりわけアンダルシーア諸港に定住して母国商人の代理商をつとめるフランス人が増加したものと推測されるのである。[7] 実際一五七八年から八一年にかけてセビーリャ、バルセローナ、カディスにあいついでフランス人領事が置かれているが、[8] このことはこれら各都市に居住するフランス人がすでに相当な数にのぼっていたことを物語るものであろう。[9]

このような一六世紀におけるフランスの対スペイン貿易の発展がスペイン領アメリカ市場の出現に起因するものであったことは容易に推察されるであろう。この点をより立ち入って検討してみるならば、まず政治学者ジャン・ボダンは一五六八年に著わした『マレトロワ氏のパラドックスへの反論』において、スペインとその植民地にとってのフランス工業製品の決定的重要性をつぎのように指摘している。「スペイン人はフランスに頼ることによってしか生存できないので、小麦・麻織物・毛織物・大青・紙・本、さらに木製品やすべての手工品をも必然的にフランスから輸入しなければならず、それゆえ彼らは世界の果てまでわれわれのために金銀と香辛料を探しに行くのである。[10]」また同時代の地理学者ニコラ・ド・ニコライは、一五七三年に作成したフランス王国の輸入商品一覧表の中で、スペインから年々三〇〇万リーヴル以上の金銀が輸入されることを指摘している。[11] ボダンのあげるフランスのスペイン向け輸出品の中で最大の比重を占めていたのは、疑いもなく麻織物であるが、このフランス産麻織物のスペイン本国とその植民地に対する輸出が一六世紀後半にめざましい増加をとげたことは、現代の多数の歴史家によっても確認されている。この時期にはR・ガスコンが明らかにし

たように、南フランスのリヨン周辺地域で製造された麻織物がマルセイユ経由でスペインの地中海沿岸のバルセローナやバレンシアへ大量に輸出されるようになったが[12]、しかしはるかにより重要なのは、当時のフランス最大の麻織物工業地域たる西部諸州の生産物のスペイン向け輸出が急増したことである。フェリーペ二世時代のスペイン植民地貿易に関するE・ロレンソ＝サンスの近著によれば、この時期にスペイン本国からそのアメリカ植民地へ輸出された繊維製品の中では、ノルマンディーのルーアン近郊で製造された上質の亜麻布（ルーアン織）が最大の品目を形づくっていた[13]。またF・ブールデとR・デュランの分析によると、ブルターニュの麻織物取引の一中心地ヴィトレからは、カヌヴァと呼ばれる粗織りの麻布の輸出が一五七〇―七五年の年平均七二万六〇〇〇オーヌ（一オーヌは約一・二メートル）から一五七五―八〇年には年平均一一五万三〇〇〇オーヌに、ついで一五八五年には一五四万五〇〇〇オーヌにと著しい増加を示したが[14]、このヴィトレの商人は当時スペイン南部のカディスやサンルーカルに定住しつつ、麻織物の販売に従事していたのである[15]。さらに当時スペイン植民地貿易の独占基地であったセビーリャ港の輸出記録によると、ブルターニュ、メーヌ、アンジュー、ポワトゥーという西部四州で生産された麻織物のアメリカ向け輸出量は、一五八六年の四四万バラ（一バラは〇・八四メートル）から一五九四年には一五八万五〇〇〇バラへと急増を示し、さらに一六〇八年には三九五万バラへと再び飛躍的増加をとげている[16]。この一六〇八年という年は、スペインからアメリカ植民地へ派遣された船舶の総トン数が一五〇四―一六五〇年を通じて最高を記録した年であることに注意しておこう[17]。

以上の事実から、フランスが一六世紀中葉以降スペイン植民地市場の拡大と並行して、スペイン本国に対する麻織物の輸出を急速に増加させて行ったことは疑いのないところと思われるが、同時に確実とみられるのは、フランスがこの時期に新世界に対する麻織物の供給量の点でヨーロッパ諸国中断然首位を占めていたことである。スペインは元来、国内にめぼしい麻織物工業をもたず、植民地市場の出現以前においてもフランスやネーデルラントからの輸入麻織物に大きく依存しなければならなかった[18]。ところで、E・サブの研究によれば、一六世紀前半にネーデルラントにおける麻織物の生産と

第1表　アンダルシーア諸港到着外国船舶の国籍別

港　別	時　期	総数	フランス	イングランド	スコットランド	アイルランド	オランダ	フランドル	ドイツ
サンルーカル	1605年3月13日～20日	59	39	5	4	0	0	11	0
	1605年4月25日～5月1日	55	27	19	6	0	2	1	0
プエルト＝デ＝サンタマリーア	1606年1～12月	51	26	13	2	4	4	1	1
セビーリャ	1606年1～2月	66	35	13	6	12			

（資料）M. Moret, *Aspects de la société marchande de Séville au début du XVIIe siècle*, 1967, pp. 35, 37, 75.

そのスペイン向け輸出が驚くべき増加を示し、一五五三年には総輸出高は八万三八一九反に達した。[19] このようなネーデルラント産麻織物の輸出増加はいうまでもなく新世界における麻織物の販路拡大によるものであったが、この時期にはまたフランス＝スペイン間の戦争によってフランス産麻織物のスペイン向け輸出が甚だしく困難になっていたという事情をも考慮しなければなるまい。しかるに一五五九年の講和ののちフランス産麻織物のスペイン向け輸出が急増しはじめたのに対して、ネーデルラントにおいては一五六八年以降、対スペイン独立戦争の開始とともに麻織物生産は漸次衰退に向い、一五八〇年代には危機的様相を呈するにいたった。[20] もちろんネーデルラントとスペインとの間の貿易は独立戦争中もけっして途絶えたわけではないが、[21] しかし一六世紀後半のうちにフランスがスペイン領アメリカへ送られる麻織物の大部分を供給するようになったことは、間違いのないところであろう。

ボダンのあげるいまひとつの重要な輸出商品＝毛織物については事情はどのようであったか。わが国においては従来一般に、一六世紀にスペイン領アメリカへ輸出された毛織物は、スペイン自体の生産物を別にすればもっぱらイギリスとネーデルラントから供給されたとみなされ、フランス産毛織物については言及されることがないが、この点は再検討を要するように思われる。というのも、P・デイヨンの分析によると、一六世紀後半に著しい成長をとげたピカルディーのアミアンの毛織物工業（セイ織布業）は、一五六三―八五年と一五九八―一六三〇年

との二つの時期にその生産物のかなりの部分をイベリア世界へ輸出することに成功しており[22]、またスペインに対する伝統的な毛織物輸出地域であったノルマンディーやラングドックも、少なくとも一七世紀初頭まではスペイン市場においてその毛織物に対する一定の販路を確保しつづけたと考えられるからである[23]。われわれはこの時期にスペイン本国へもたらされた毛織物の総量と、その中に占める各国のシェアーを直接に把握しうる史料をもたないが、M・モレによって明らかにされた一七世紀初頭におけるアンダルシーア諸港到着外国船舶の国籍別構成は、スペイン市場におけるイギリスの優位というわが国での通説に疑問を投じるものといわなければならない。第一表によると、一六〇五—〇六年にセビーリャ、サンルーカル、プエルト＝デ＝サンタマリーア三港に到着した外国船の中ではフランス船が実に過半数を占めており、一方一六〇四年までスペインと戦争状態にあったイギリスの船舶は、スコットランド船、アイルランド船を含めてもフランス船の半数あまりにとどまっている[24]。モレによれば、フランス船の積み荷の中では小麦と麻織物・毛織物が主力をなしており、とくに麻織物についてはフランス船がその主たる供給者であった[25]。この時期になおスペインと戦争状態にあったオランダの船舶がごく少数しかみられないのは当然であるが、フランス船の中にはオランダ船の偽装したものが含まれていた可能性があり、またフランス船の積み荷の中にはネーデルラント産の麻織物や毛織物がかなり含まれていたものと推定される[26]。これらの点を考慮するとしても、スペインのアメリカ植民地貿易が発展の一つのピークに達した一七世紀初頭において、その基地となったアンダルシーア諸港に対するフランスの輸出活動がイギリス、オランダ両国のそれを凌ぐ勢いを示していたことは認めてよいであろう[27]。

① H. et P. Chaunu, *Séville et l'Atlantique (1504-1650)*, 12 vol., 1955-60, t. VI_1, p. 341, Tableau 143, t. VIII_{2-1}, pp. 16-17, 49-50.

② E. J. Hamilton, *American Treasure and the Price Revolution in Spain, 1501-1650*, 1934, p. 42, Table 3.

③ A. Girard, *op. cit.*, pp. 43-45. なお、ノルマンディーとスペインの間の貿易については M. Mollat, *Le commerce maritime normand à la fin du Moyen Age*, 1950, pp. 225-234, またブルターニュ＝スペイン間貿易については H. Touchard, *Le commerce maritime breton à la fin du Moyen Age*, 1967, pp. 210-222, 280-283, をそれぞれ参照。

⑭ Girard, *op. cit.*, p. 45 ; Mollat, *op. cit.*, pp. 507–515.

⑮ Girard, *op. cit.*, pp. 45–47.

⑯ *Ibid.*, p. 53.

⑰ H. Lapeyre, *Une famille de marchands : les Ruiz*, 1955, p. 399.

⑱ Girard, *op. cit.*, p. 51.

⑲ Cf. *Ibid*, pp. 50, 547 ; Lorenzo Sanz, *op. cit.*, t. I, pp. 45, 89–90.

⑳ H. Hauser, éd., *La response de Jean Bodin à M. de Malestroit*, 1932, p. 13.

㉑ Nicolas de Nicolay, *Description générale de la ville de Lyon et des anciennes provinces du Lyonnais et du Beaujolais*, publ. par la Société de topographie historique de Lyon, 1881, p. 186. Cf. Lapeyre, *op. cit.*, p. 319.

㉒ R. Gascon, *Grand commerce et vie urbaine au XVIe siècle*, 2 vol., 1971, t. I, p. 80.

㉓ E. Lorenzo Sanz, *op. cit.*, t. I, pp. 447–450.

㉔ F. Bourdais et R. Durand, L'industrie et le commerce de la toile en Bretagne au XVIIIe siècle, *Bulletin du comité des travaux historiques*, fasc. VII, 1922, p. 22. このタイトルの麻織物輸出量はヨーロッパ全体に対するものであるが、一五六〇年以降とくにスペインへと輸出が集中したという。Girard, *op. cit.*, p. 46.

㉕ *Ibid.*, pp. 547–548 ; Bourdais et Durand, *op. cit.*, p. 14.

㉖ J. Delumeau, Le commerce extérieur français au XVIIe siècle, *Le XVIIe siècle*, N°s 70–71, 1966, p. 82.

㉗ Chaunu, *op. cit.*, t. VIII $_{2,1}$, p. 16.

㉘ Girard, *op. cit.*, p. 339 ; Lorenzo Sanz, *op. cit.*, t. I, p. 433–434.

㉙ E. Sabbe, *Histoire de l'industrie linière en Belgique*, 1945, pp. 15–16, 23–24.

㉚ *Ibid.*, p. 24.

㉛ スペイン＝ネーデルラント間の貿易は一五八六年まで公認されており、また叛乱諸州との貿易が禁止された一五八六年以後も、フランスの港と船舶を利用しつつ貿易は続行された。しかしフランドル商品のスペインへの到着は少量にとどまり、一五九五年にはメキシコ向け船団の積み荷の確保のために叛乱州の商品の輸入を許可しなければならなかった。Lorenzo Sanz, *op. cit.*, t. I, pp. 457–458.

㉜ P. Deyon, *Amiens, capitale provinciale*, 1967, p. 168. デイヨンによると、アミアンの毛織物工業は一六三〇年以降の生産の低落期にその外部市場の大部分を失ったという。*Ibid.*, p. 169.

㉝ Girard, *op. cit.*, pp. 358–363.

㉞ しかもこれらのイギリス船がセビーリャへもたらす穀物の大半は、大陸諸国の生産物の再輸出分からなっていた。ロンドン港の記録によると、H・I・テイラーの研究によると、一六〇四年一〇―一二月にスペインへ輸出された商品は価額でみて六〇％近くがリンネル・フェスチアン・蝋等、主にドイツ、ベルト海諸国、ロシアからの輸入品であった。H. I. Taylor, English merchants and Spanish Prices about 1600, H. Kellenbenz, ed., *Fremde Kaufleute auf der Iberischen Halbinsel*, 1970, p. 253.

㉟ Moret, *op. cit.*, p. 76.

㊱ *Ibid.*, pp. 43–45.

㊲ イギリスが一七世紀の前半にスペインに対する毛織物輸出をどの程度拡大しえたかは、今日、論者の間で意見の分かれる点である。すなわち、E・J・フィッシャーらがロンドンからスペインおよび地中海諸港へ向けての新毛織物輸出の持続的増加を主張するのに対して、テイラーらはイギリスのスペイン向け毛織物輸出が一六〇四年の講和ののち伸び悩みをつづけたとみなしている。Cf. F. J. Fisher, London's

Export Trade in the Early Seventeenth Century, *Econ. Hist. Rev.*, 2nd ser., III, 1950 (1), pp. 151-161（浅田実訳『十六・七世紀の英国経済』、未来社、一九七一年、九九―一二〇頁）; Taylor, *op. cit.*, p. 255; R. T. Rapp, The Unmaking of the Mediterranean Trade Hegemony: International Trade Rivalry and the Commercial Revolution, *Journal of Econ. Hist.*, XXXV, 1975 (3), p. 503.

二　一七世紀スペイン植民地貿易の動態

前述のハミルトンが提供するデータによれば、アメリカ植民地からスペインへの貴金属の流入量は一五九〇年代にピークに達したのち下降に転じたが、一六〇〇―三〇年の間はなお最高時の約八割という比較的高い水準にとどまっていた。しかるに一六三〇年代に入ると貴金属の流入量は急速度で減少するにいたり、一六五一―六〇年にはもはや最高時の六分の一以下にすぎなくなっている。[1] またショーニュの分析によると、スペイン＝アメリカ間を航行した船舶の総トン数は一六〇六―一〇年にピークに達したのち、一六四〇年代まで一貫して減少傾向をつづけており、一六四六―五〇年には最盛時の二分の一以下の一二万一三〇八トンにすぎなくなっている。[2] ショーニュはこのような事実にもとづいて、一六世紀初頭以来のスペイン＝アメリカ間貿易の展開過程を、一六〇六―一〇年以前の長期上昇局面とそれ以後の長期下降局面とに明確に区分する。そしてスペインの物価指数が一六〇一―一〇年を境に長期的上昇から長期的下降へと転じた事実をも考慮しつつ、スペインおよびスペイン領アメリカ経済が一六世紀の拡張局面から一七世紀の収縮局面へ移行したとみなすのである。[3]

ハミルトンはその研究を一六六〇年で打ち切っているが、しかし一六六〇―一七〇〇年においても、スペイン国内物価の低落ないし停滞傾向からみてアメリカからの貴金属流入量は引きつづき低い水準にとどまったものと推定している。[4] またショーニュも一六五〇年以後については具体的分析を行なっていないが、全ヨーロッパ的物価下落の趨勢からみて、スペイン植民地貿易の衰勢は一七世紀末まで継続したとみなしている。[5] ところでショーニュが分析しなかった一六五〇―一七〇〇年のスペイン＝アメリカ間貿易については、最近L・ガルシーア＝フエンテスによる詳細な研究が発表された。そ

れによると、スペイン＝アメリカ間を航行した船舶数は第二表が示しているように一六五〇年以後も減少をつづけており、一六七〇年代には幾分回復を示すものの、一七世紀前半に比べればはるかに少なくなっている。[6] またこれらの船舶の総トン数の動きをみるならば、第三表が示しているように一六五〇―一七〇〇年を通じて減少傾向が認められ、とりわけ帰りの船舶について総トン数の減少が著しいのである。[7]

第2表　スペイン＝アメリカ間航行船舶数

1600―09年	1,683隻
1610―19	1,728
1620―29	1,377
1630―39	1,043
1640―49	742
1650―59	410
1660―69	298
1670―79	432
1680―89	368
1690―99	327

（資料）L. García Fuentes, *El comercio español con América, 1650-1700*, 1980, p. 220.

このように船舶数または総トン数の変動をみるかぎり、スペイン植民地貿易が一六一〇年以降、一七世紀を通じて長期の収縮局面の中にあったことは、疑う余地がないようにみえる。このような見方は比較的最近まで通説の座を占めてきたのであるが、近年M・モリノーによって根本的な批判をうけるにいたった。モリノーの批判はつぎの二点に要約される。その第一は、植民地貿易に従事した船舶の総トン数が一七世紀の間に大幅に減少したとしても、そのことは船荷の価値が低下したことを必ずしも意味しないという点であり、第二は、一七世紀におけるアメリカからの貴金属の流入量については、ハミルトンが依拠した公式輸入統計によってはその変動を正確に知ることができないという点である。[8] まず第一の点についてモリノーが強調するのは、一七世紀に入るとともにアメリカ向けの船荷の中で繊維製品のように高価でかさばらない商品が比重を増したという事実である。いま一五九七年にメキシコへ派遣された一万六〇〇〇トンの船団と一七二九年の八〇〇〇トンの船団との積み荷を比較してみると、前者において一万二〇〇〇トンを占めるぶどう酒と火酒が後者においてはわずか三〇〇〇トンを占めるにすぎない。つまり両者の総トン数の違いはもっぱらぶどう酒と火酒の積載量の違いに帰せられるのであり、したがって他の積み荷の内容如何によっ

第3表　スペイン＝アメリカ間航行船舶の総トン数

年	往き	帰り	合計
1650―59	40,922トン	33,080トン	74,002トン
1660―69	50,488	19,138	69,626
1670―79	45,158	22,741	67,899
1680―89	40,439	11,656	52,095
1690―99	40,773	8,573	49,346

（資料）García Fuentes, *op. cit.*, p. 223.

ては、総トン数の低下は船荷総額の低下を必ずしも意味しないのである。[9] 実際、リヨン製の金銀糸入りレースのような高級織物は、一重量トン分でヘレス産のぶどう酒一〇〇〇容量トン分の価値を有しており、また一六世紀におけるアメリカの最大の帰り荷の一つである一六〇〇万ピアストルの貴金属といえども、その輸送にわずか四〇〇トンの容積しか必要としなかった。[10] それゆえ、一六世紀末における西インド航路の船舶総トン数の膨脹と一七世紀におけるその収縮という事実のみから、スペイン植民地貿易の景況について結論を下すことはできないのである。

つぎに第二の貴金属流入量の問題についてモリノーは、商人の申告額にもとづく公式輸入統計には一六三〇年以降夥しい量の記録もれが生じているがゆえに、これに依拠したハミルトンの数字は一六三〇—六〇年については使用できないとする。そして公式輸入統計以外のさまざまな史料、すなわちカディス在住の各国商人の本国宛書簡や各国領事の報告、とりわけ当時の国際商業＝金融中枢たるオランダの各種新聞が提供する情報にもとづいて、[11] 一七世紀におけるスペイン領アメリカ産貴金属の流入量について全く新しいデータを提出するのである。それを要約して示せば第四表の通りであり、一七世紀前半にはたしかに一六世紀末に比べて貴金属流入量の減衰がみられるが、しかしこの減衰はハミルトンの数字が示すよりも軽度のものであり、激しい落ち込みは一六四六—五五年にはじめて現われている。[12] しかも一六五六年以降の回復はめざましく、一六六一年以降一七世紀末までの貴金属流入量は一六七一—七五年を唯一の例外として、一六世紀の最盛時よりもつねに上まわっているのである。[13]

第4表　スペインへのアメリカ貴金属の輸入
（単位：100万ピアストル）

1586—	90年	39.4	1641—45年	(46.9)
1591—	95	58.2	1646—50	(22,7)
1596—1600		62.8	1651—55	(21.4)
1601—	05	40.3	1656—60	50.1
1606—	10	51.9	1661—65	86.9
1611—	15	43.1	1666—70	70.0
1616—	20	49.8	1671—75	56.3
1621—	25	46.1	1676—80	84.5
1626—	30	52.5	1681—85	67.0
1631—	35	46.2	1686—90	75.5
1636—	40	(46.0)	1691—95	69.8

（資料）Morineau, Critique, p. 83.

このような一七世紀後半における貴金属流入量の著しい増加は、他の研究者によっても同様に指摘されている。たとえばJ・エフェラールトはモリノーと同様に「非公式な」史料にもとづいて、一六七〇—一七〇〇年におけるスペインへの

貴金属流入量が五年毎の累計額で三五〇〇万ペソから六六〇〇万ペソにのぼっており、ハミルトンのいう一五九一—一六〇〇年ピーク時の公式輸入額（五年間に約三五〇〇万ペソ）を上まわっていたことを確認している。[14] またH・カーメンも、カディス駐在のフランス人領事ピエール・カタランの報告にもとづいて、一六七〇—一七〇〇年に派遣されたメキシコ向けの一四の船団 flota とティエラ・フィルメ（南米北海岸）向けの八つの船団 galeones が総額二億四〇〇〇万ペソ、五年間の平均で四〇〇〇万ペソの貴金属を持ち帰ったとみている。[15] さらにガルシーア＝フエンテスも、公式統計による貴金属の輸入量が一六六〇—一七〇〇年の累計値でわずか二五〇〇万ペソにすぎないことを確認した上で、実際の輸入量はモリノーとエフェラールトの数字にきわめて近いものであっただろうと推定している。[16] そしてこの時期に植民地貿易が活況を呈していたとみるべき証拠として、ティエラ・フィルメ向け船団が毎回一〇〇〇—二〇〇〇万ペソ、メキシコ向け船団が四〇〇—八〇〇万ペソという多額の積み荷をもって出発した事実をあげるのである。[17]

このようにモリノーの二つの論点のうち、一七世紀後半にアメリカからの貴金属流入量の著しい増加が生じたという点は今日広く承認されるようになっており、おそらく間違いのない事実と考えられる。これに対して、一六三〇—六〇年についてはモリノーが用いた史料自体に一部欠落があることもあって早急な結論を下しえないが、この時期においても貴金属の流入量がハミルトンの数字ほどには減少しなかったということは認めてよいであろう。それではモリノーのいまひとつの論点、すなわち一七世紀におけるアメリカ向け船荷の性格の変化という点には果して疑問の余地がないであろうか。つぎにわれわれはスペインのアメリカ向け輸出商品の構成の推移について検討してみなければならない。

まずこの点についてのショーニュの見解はつぎのようである。[19] 一六世紀の植民地化の初期においてはアメリカ向け輸出商品の中で、家畜等の農業資本財と小麦粉・ぶどう酒・オリーヴ油などの食料品とが支配的部分を形づくっていた。しかし植民地内部における食糧自給化の進展とともに一五三七—四一年頃からは、鉱山・砂糖工場のための設備財＝鉄製品やとりわけ織物類の比重が増大しはじめ、一五七〇年以降はこれら工業製品が価額の点で支配的部分を占めるようになった。[20]

ところでアメリカ向けの船荷は、前述の舶舶総トン数の動きが示しているように量的には一六〇六―一〇年頃をピークとして減少に向ったが、しかし一六四〇年頃までは輸出商品の単位価格が上昇しているために、船荷の価額はその物量ほどには減少していない。しかるに一六四〇年以降になると輸出商品の単価自体が低下に向ったために、輸出額の減少は輸出量の減少よりも一層急速となった。

このようにショーニュは、アメリカ向け輸出商品の中では一五七〇年以降一貫して工業製品が支配的比重を占めるとみた上で、この輸出商品の総額が一七世紀初頭から徐々に、一六四〇年代からは急速に、減少するにいたったと説くのであるが、[21] しかし彼の見解は現実のアメリカ向け船荷についての詳細な計量的分析によって裏づけられているわけではない。そこに一七世紀における船荷の内容の変化、軽量・高価な輸出品の比重の増大という前述のモリノー説が出てくる理由があるが、それでは後者の主張は十分な実証的根拠をもっているであろうか。前掲のガルシーア＝フエンテスの研究は、一七世紀の後半に限ってではあるが、アメリカ向け輸出商品の内容について多くのデータを提供

第5表　スペイン領アメリカへの主要輸出商品（1650―99年）

年	農産物					織維製品	紙
	ぶどう酒	火酒	油	酢	合計		
	アローバ	アローバ	アローバ	アローバ	アローバ	梱	大梱
1650―59	322,976	6,424	25,526	5,628	360,554	4,570	295
1660―69	553,294	8,262	51,954	1,129	614,639	16,034	3,379
1670―79	525,078	23,868	63,002	908	612,857	31,065	7,507
1680―89	366,503	76,578	64,336	2,539	509,956	22,899	11,564
1690―99	286,970	118,610	78,541	7,256	491,376	30,398	12,238

年	書籍	鉄	金属製品				
			金具	釘	刃物	窄の刃	鍬
	箱	キンタール	箱	箱	箱	枚	本
1650―59	673	8,650	2,378	585	86	5,264	6,975
1660―69	1,931	20,117	8,363	3,822	516	30,742	43,650
1670―79	1,487	48,728	11,672	2,442	1,730	38,324	39,115
1680―89	1,292	46,010	9,850	475	1,457	44,270	7,479
1690―99	1,253	85,899	16,016	4,321	2,251	41,102	9,909

数字は10年間の合計値。鉄は原表中の planchuelas, cabos, cuadradillo, hijuelas の4品目を含む。
（資料）García Fuentes, *op. cit.*, pp. 244-253, 267-278, 300-312.

している。それによると、一六五〇—九九年におけるアメリカ向けぶどう酒の年間輸出量は、一六七三年の一四万七八八一アローバを最高に、多い年で九—一二万アローバであった。[22] 前述の一五九七年のフロータには六〇万アローバにのぼるぶどう酒が積み込まれていたから、[23] アメリカ植民地に対するぶどう酒の輸出量は一七世紀前半のうちに激減するにいたったことになる。しかしわれわれは、この間に繊維製品に代表される軽量・高価な商品の輸出が、価額の点でぶどう酒輸出の減少分を補って余りあるほどの増加をとげたかどうかについては残念ながら明確にできない。ここでは第五表に要約したガルシーア＝フエンテスの分析結果にもとづいて、以下の二つの事実を確認しておくことにしよう。その第一は、一七世紀後半だけをとってみるならば、ほとんどの商品の輸出量が一六五〇—五九年にはきわめて低い水準にあり、六〇年代に入るとともに著しい増加を示すという事実である。この点は前述の貴金属流入量の動きとも基本的に一致しており、一七世紀中葉におけるスペイン＝アメリカ間貿易の不況の深刻さと、その後の景気回復とを示唆するものといえよう。確認しておきたい第二の点は、ぶどう酒を主体とする農産物の輸出量が一六六〇年代をピークとして、以後伸び悩みから減少に向っているのに対して、繊維製品・紙・書籍・鉄・金属製品等工業生産物の輸出量は全体として一六七〇年代以降に最大規模に達していること、したがって一六七〇—九〇年代には一六五〇—六〇年代に比べて、アメリカ向け輸出商品全体に占める工業生産物の比重が確実に上昇したと推定されること、である。これらの事実からすれば、スペインのアメリカ植民地向け輸出額が一七世紀前半のうちに大幅な減少をこうむったことは、おそらく否定できないとしても、この輸出額はその後一七世紀後半を通じて低迷をつづけたのではなく、一六七〇年頃から著しい回復を示したと考えるべきであろう。

① Hamilton, *op. cit.*, p. 42, Table 3.

② Chaunu, *op. cit.*, t. VI$_1$, p. 341, Tableau 143, t. VIII$_{2,1}$, pp. 17–18.

③ *Ibid.*, t. VIII $_{2,1}$ pp. 15–17.

④ E. J. Hamilton, *War and Prices in Spain, 1651–1800*, 1947, pp. 132–133.

⑤ Chaunu, *op. cit.*, t. VIII $_{2,2}$, p. 1538. 同様の見解は Lynch, *op. cit.*, Vol. 2, pp. 208–209 にもみられる。

⑥ 護送船団制を完成した一五六四年の王令においてはメキシコと南米北岸（ティエラ・フィルメ）とに向けてそれぞれ毎年一回船団が派遣

されることになっていたが、一七世紀後半にはメキシコ向け船団は平均二年に一回、ティエラ・フィルメ向け船団は三年に一回しか派遣されていない。García Fuentes, *op. cit.*, p. 164.

⑦ ただし、第二表の一六五〇—九九年の数字は商船隊の護送にあたった軍艦と、奴隷貿易船とを含まないため、厳密にはそれ以前の時期の数字と比較できない。*Ibid.*, pp. 221–223.

⑧ M. Morineau, Des métaux précieux américains au XVIIIe siècle et de leur influence, H. Kellenbenz, ed., *Precious Metals in the Age of Expansion. Papers of the XIVth International Congress of the Historical Studies*, 1981, pp. 243–264; do., Critique des signes, Léon, éd., *op. cit.*, t. III, pp. 80–85. なお、モリノーはこの問題にかんして多数の論文を書いているが、その研究の決定版というべき著書 M. Morineau, *Incroyables gazettes et fabuleux métaux. Les retours des trésors américains d'après les gazettes hollandaises, XVIe-XVIIe et XVIIIe siècles* が近く刊行される由である。

⑨ Morineau, Des métaux, p. 256.

⑩ *Ibid.*, pp. 255–256.

⑪ これら「非公式」の情報の出所と信憑性については、Cf. *Ibid.*, pp. 245–249; Morineau, Critique, pp. 81–82.

⑫⑬ do., Des métaux, p. 253.

⑭ J. Everaert, *De internationale en koloniale Handel der Vlaamse Firma's te Cadiz, 1670–1700*, 1973, p. 902. 本書にはフランス語による約七〇頁のレジュメが付せられている。なお、ハミルトンの数字については、Cf. Hamilton, *American Treasure*, p. 34, Table 1.

⑮ H. Kamen, *Spain in the Later Seventeenth Century, 1665–1700*, 1980, p. 136.

⑯ García Fuentes, *op. cit.*, p. 382.

⑰ *Ibid.*, pp. 382–383. このアメリカ向け積み荷の価額はセビーリャの西インド商務院総裁が提供する情報（一六七三年一一月一四日付）による。

⑱ Morineau, Critique, pp. 82–83. 第四表の一六三六—五五年の数字は、このような理由でやや確実性を欠くためカッコに入れられている。

⑲ Chaunu, *op. cit.*, t. VIII$_{2}$, $_{1}$, p. 178, t. VIII $_{2}$, $_{2}$, pp. 1545–1546.

⑳ この点はロレンソ＝サンスによっても確認されている。Lorenzo Sanz, *op. cit.*, t. I, p. 427.

㉑ Chaunu, *op. cit.*, t. VIII$_{2}$, $_{2}$, p. 1850.

㉒ García Fuentes, *op. cit.*, pp. 432–434, Tabla 6. ただし、これはガレオーネスを含むすべてのアメリカ向け船舶による輸出量であり、メキシコ向けフロータのみの輸出量ではない。

㉓ F. Chevalier, Les cargaisons des flottes de la Nouvelle-Espagne vers 1600, *Revista de Indias*, IV, 1943, p. 324.

三　一七世紀フランスの対スペイン貿易

さて、一七世紀におけるスペイン植民地貿易の動態をおよそ以上のように捉えることができるとするならば、同じ時期にフランスの対スペイン貿易はどのような展開をとげたであろうか。

フランス重商主義の初期の理論家モンクレティアンは、一六一五年に公刊した『政治経済要論』において、スペインにとっての対フランス貿易の重要性、とりわけスペイン植民地貿易に占めるフランス産麻織物の基軸的意義について以下のように述べている。「第一に帆布製造のための麻織物はフランス以外からは入手できない。第二に西インド貿易はノルマンディー、ブルターニュおよびこの王国の他の諸州で産せられる白色および未漂白の麻織物によってしか行なわれえない。というのも、オランダ、フランドル、ドイツの麻織物は西インドへはほとんど輸送されないからである。かくして麻織物工業がフランスの主要な鉱山の一つであり、そのためにポトシ銀山がその銀のほとんどを吐き出していること、またこの麻織物工業なくしてはスペイン人自身がスペインへ銀をもたらしえないということは、依然として疑う余地がないのである[①]」。また、一六四〇年前後のフランス対外貿易の実態について詳細な調査を行なった、ブルターニュ出身の経済理論家ジャン・エオンも、その著『尊敬すべき商業』（一六四六）において、つぎのように述べている。「それなくしてはスペインがスペインたりえない西インド貿易は、さまざまな種類のわが国の製造品によってしか行なわれえないであろう[②]」。「スペイン人はわが国の商品なくしては西インドから金銀を引き出すことができない。その上彼らは、わが貿易船の帰り荷を作るのに十分なだけの自国の産物をもっていないので、少なくともわれわれがわが商品の対価として銀をもち帰るのを許すべきである[③]」。さらにエオンは、当時フランスの対外貿易がいたるところで、外国の商人と船舶によって掌握されていることを指摘した上で、例外的にフランス人がみずからの手で行なっている二つの貿易セクターとしてイタリア・レヴァント貿易とスペイン・ポルトガル・イギリス貿易とをあげる。そしてイタリア・レヴァントとの貿易は大量の銀を流出させるがゆえに、フランスにとって有益であるよりもはるかに多く有害であること、またスペイン・ポルトガル・イギリスに対しては、フランスは麻織物・小麦・小間物・金物を輸出し、かつその所有するごく少数の船舶をこの貿易に用いるが、しかし海上での多くの危険やスペイン人によるフランス商人の虐待のゆえに、この貿易によっては偶然にしか利益をうることができないこと、を指摘するのである[④]。

それではモンクレティアンやエオンの指摘する事実は、同時代の他の史料によって確証されるであろうか。まず一六二四年の「アメリカとの航海・商業の現状に関するフランス国王宛覚書」によると、「西インドにとって最も必要な商品はあらゆる種類のリンネルと帆布製造用の麻織物であるが、これらの西インド向け麻織物はフランス以外の国々ではほとんど製造されていない」[5]という。またスペイン駐在フランス大使デュ・ファルジの一六二八年の覚書は、フランスの麻織物のスペイン向け輸出額を年間五〇〇万金エキュ（一五〇〇万リーヴル）と見積もっている。この数字はスペイン本国全体への輸出額であるが、大使によれば、これら麻織物のスペイン側の主な輸入港は植民地貿易の基地であるカディス、サンルーカル、セビーリャであった[6]。またこの一五〇〇万リーヴルという一六二八年のスペイン向け麻織物輸出額は、われわれの知るかぎり、その後一七世紀をつうじてけっして凌駕されることのない数字である[7]。

ところで右の一六二四年の覚書の筆者は、モンクレティアンと同様、フランドル、オランダ等の麻織物は西インドへほとんど送られていないと述べているのであるが[8]、この点は事実に反するように思われる。前述のサブの分析によると、一六世紀後半オランダ独立戦争のため衰微していた南ネーデルラントの麻織物工業は、一七世紀に入るとともに急速に復興に向い、その生産量はまもなく一六世紀の最高水準を突破したが、このような麻織物生産の発展の原動力となったのは輸出市場の拡大であり、とりわけスペインとそのアメリカ植民地は夥しい量のフランドル産リンネルを吸収するにいたった[9]。とくにフランス＝スペイン間の戦争によってフランス産麻織物のスペインへの輸入が困難となった一六三五年以後の時期には、フランドル産麻織物がスペイン市場において優位を占めるようになったのである[10]。

ジラールの分析によると、フランスのスペイン向け輸出は、フランドル商品の進出によってだけでなく、スペイン宰相オリバーレスが一六二三年に打ち出した、国内工業保護のための外国工業製品の輸入制限策によっても、少なからぬ打撃をこうむったようにみえる[11]。エオンも指摘しているが、フランス商人は一六三五年の対スペイン開戦以前からすでに、スペインにおいて財産の恣意的没収や船舶・船員の徴発など官憲によるさまざまな迫害をうけることになった[12]。しかし戦争

勃発後もスペイン政府は、一六五〇年まではフランス商人に特許状を売りつけて麻織物・小麦・綱具などを輸入させたので、フランス＝スペイン間の貿易は完全に中断することはなかった。[13] のみならずフランスは、イギリス、オランダ、ハンザ諸都市など中立諸国の船舶を利用することによってもスペインとの貿易を続行することができた。[14] この中立国船による「代理貿易」は、スペイン政府が対フランス貿易を全面的に禁止した一六五〇年代にそのピークに達する。[15] ジラールはフランスの対スペイン貿易が一六三五年以降、とりわけ一六四八年以降「異常な成長」をとげたと述べている。[16] とはいえ、この時期がスペイン植民地貿易の衰退期であったことを考慮するならば、フランス麻織物のスペイン向け輸出量が前述の一六二八年頃に比べて著しく減少したことは、おそらく間違いのないところであろう。

さて、仏西間の戦争に終止符をうった一六五九年のピレネー条約は、周知のごとくヨーロッパ国際政治史における「スペインの優位」の終焉を画するものであったが、同時にまたフランス＝スペイン貿易の歴史においても画期的意義をもっている。そもそも一七世紀前半に、スペインにおけるフランス人の貿易活動にとって一つの障害となっていたのは、ハンザ諸都市、イギリス、オランダの商人がスペインで享受していた諸特権（輸出入関税の減免、名誉領事（特別判事）職の設置、家屋・倉庫・商店の不可侵等）をフランス商人が未だ享受していないという事情であった。[17] このような状態を改善するための努力は一六二六年頃からリシュリューによって試みられていたが、仏西関係の悪化と戦争勃発のために、その実現にはピレネー条約を待たなければならなかった。フランスはこの条約の第六条によってスペインから最恵国待遇を獲得し、ここにはじめてフランス商人はスペインでの貿易活動において、競争国の商人と同一の特権を享受しうることになったのである。[18] しかしフランス側が最も強く要求した自国船舶に対するスペイン官憲の臨検禁止は、ハンザ諸都市とオランダがすでにこの特権を享受していたにもかかわらず、ピレネー条約中に明記されなかった。[19] その後イギリスが一六六七年にスペインと結んだ通商条約の第一〇条において、船舶臨検の免除を明記させると、フランス政府は前述の最恵国条款にもとづいて、この特権の自国への適用をスペインに要求し、一六七〇年一二月二日の勅令によってフランス船に対する

臨検の免除を約束させた。[20] しかしスペインはその後も密輸の阻止を理由に臨検をやめず、右の勅令の履行を要求するフランス側との間に永らく紛争がつづくことになる。[21]

このようにスペイン政府はピレネー条約ののちにも、条約の規定をできる限り空文化しながら自国におけるフランス人の貿易活動、とりわけカディスにおける彼らの密輸活動を抑圧することにつとめたのである。スペイン当局が外国人の中でもとくにフランス人を目の敵にしたという事実は、スペインにおけるフランス人の貿易活動が他の諸国民のそれにもまして旺盛であったことを示唆するように思われるが、それではこの時期に実際の貿易の状況はどのようであったか。

この点についてはまず、カディス駐在フランス領事ピエール・カタランの一六七〇年の覚書[22]が貴重な情報を提供している。それによると、第六表が示しているように、アンダルシーア諸港には年間一三四〇万ペソ（四〇〇〇万リーヴル）にのぼるヨーロッパ各国の商品が輸入されるが、そのうち一五〇万ペソ（一一・五%）がスペイン国内で消費されるのみで、圧倒的部分（八八・五%）はアメリカ植民地へ再輸出されたのである。[23] また国別の輸入額をみると、フランスが四〇〇万ペソ（三〇%）で断然首位を占め、以下ジェノヴァ、オランダ、イギリスとフランドルの順になっており、イギリスからの輸入額はフランスからの輸入額の四〇%以下にすぎないのである。カタランはフランスからの輸入品として麻織物・絹織物・金銀と絹のレース、アミアンとシャーロンのサージ、ラシャ・小間物・金物をあげているが、[24] 各商品の輸入額を記していない。しかしこれらの中で麻織物が支配的な比重を占めていたことは、疑いのないところである。たとえば、その前年の一六六九年に書かれた駐西大使ヴィラール侯の報告は、フランス麻織物のスペインへの輸出について以下のように述べている。「フランスのスペインに対する最大の取引品は麻織物であ

第6表　アンダルシーア諸港への各国商品の輸入額(1670年)

	千ペソ	%
フランス	4,000	(30)
ジェノヴァ	2,500	(18.6)
オランダ	2,000	(15)
イギリス	1,500	(11)
フランドル	1,500	(11)
ヴェネツィア	500	(3.8)
ハンブルク	500	(3.8)
レヴァント	500	(3.8)
ポルトガル	400	(3)
計	13,400	(100)

（資料）Mémoire de Pierre Catalan, 1670, Arch. Nat., Section Affaires Etrangères (fonds consulaire), B¹ 211, fol. 53-54.

第7表　カディス港への各国商人の輸入額（1686年　単位：千リーヴル）

国　別	輸入総額	麻織物	毛織物	絹織物	レース
フランス	9,716～9,788	5,768～5,838 （約4,500）	1,615～1,653 （900以上）	953～963 （865～875）	816～836 （733～745）
ジェノヴァ	4,300			2,250以上	150以上
イギリス	3,766～3,776	5	2,104～2,114 （1836）		
オランダ	2,442～2,626	150 （140）	1,033～1,048 （985～995）	500 （500）	
フランドル	1,520～1,530	210～215	225		1,025 （900）
ハンブルク	1,477～1,493	1,367～1,383 （750以上）			
スペイン	1,120～1,225			550～600	

カッコ内はカディスからアメリカへの再輸出分を示す。
（資料）Mémoire de Patoulet sur le commerce de Cadix et des Indes occidentales, 1686, Arch. des Aff. étr., Mém. et doc., suppl. France, 1992, fol. 198-229.

る。フランスからアラゴン、カタルーニャ、ナバーラとバレンシアへ、またカスティーリャ全体とアンダルシーア、さらに西インドへ向けて無数の麻織物が到来する。フランスはヨーロッパ全体よりも多くの麻織物を供給する」[29]。

個々の商品の輸入額については、スペイン派遣フランス特使パトゥーレの一六八六年の覚書が詳しく述べている。第七表はそれにもとづいて作成したものであるが、これによって、一六八〇年代においてもフランス商人がカディス港への商品輸入額の点で各国商人中断然首位を占めていたこと、またフランス商人による輸入品の中では麻織物が約六割を占めており、その輸入額はハンブルク、フランドル、オランダからの麻織物輸入額の合計をはるかに上まわっていたことを確認できる。このフランスの麻織物はその四分の三以上、約四五〇万リーヴル分がカディスからアメリカ植民地へ再輸出されたのであり、スペインの植民地向け輸出品の中で抜群の重要性をもっていた。これに対して毛織物は、そのカディスへの輸入額、アメリカへの再輸出額ともにイギリス商人が第一位を占めているが、しかしその絶対額はいずれの場合も、フランス産麻織物の二分の一以下にすぎない。一方、カディスへもたらされたフランスの毛織物は、そのほとんどが一六六八年にフランス領となったフランドルのリールの製品であり、一七世紀初頭までスペインに一定の販路を確保していたノルマンディーやラングドックの毛織物、また前述の一六七〇年の覚書にみえるアミアンやシャンパーニュのシャーロンのサージは、

一六八〇年代にはベイ、エスタメンなどイギリスの安価な毛織物との競争に敗れてカディス市場からほとんど姿を消すにいたっている。[28] さらに絹織物についてはジェノヴァ商人が、またレースについてはフランドル商人がカディスへの最大の供給者となっているが、しかしこれらの奢侈的織物についてもフランスがイタリアやフランドルのような伝統的生産地域に対抗しつつ、スペイン市場においてかなりのシェアーを獲得するにいたったことに、注目しておく必要があろう。

パトゥーレの統計はフランドルからの麻織物の輸入額を大幅に過小評価しているといわれるが、[29] その点を考慮したとしても、フランスが一七世紀後半に、スペイン本国からアメリカ植民地へ輸出される繊維製品の最も大きな部分を供給していたという事実は、おそらく動かないところであろう。しかしここでつけ加えておかねばならないのは、一七世紀の末葉には、スペイン市場におけるフランス繊維製品のシェアーが幾分低下したとみられることである。たとえば一六九一年の匿名の一覚書は、フランス麻織物のカディス市場への輸出量が数年来大幅に減少した事実を指摘しつつ、その本質的原因としてブルターニュ、ノルマンディー、メーヌの各州で製造される麻織物の品質が低下したこと、またオランダ、ハンブルク、ドイツ、フランドルにおいてフランス製品を模倣した麻織物の生産が開始されたことをあげている。[30] これらフランス以外の麻織物のカディスへの輸入は、前述の一六八六年の覚書においてはなお少量にとどまっているものの、一六八九年以降九年にわたるアウグスブルク同盟戦争はフランス麻織物の輸出を困難ならしめることによって、[31] ドイツ、フランドル等の麻織物のカディス市場への進出を促進したであろう。さらにこの時期にはイギリス、オランダ両国によるスペイン領植民地への非合法な直接輸出が拡大しつつあり、それがカディス経由でのフランス麻織物のアメリカ向け輸出と激しく競合するにいたったことも、一六九一年の覚書が指摘するところである。[32]

最後に、一七世紀後半にフランス商人がカディスにおいてアメリカからの帰り荷のいかなる部分を獲得していたかをみておくことにする。ショーニュによると、アメリカからの輸入総額に占める貴金属の比率は一五八四―一六五三年には平均八四％であったが、[33] 前述の一六九一年の覚書によると、帰り荷の構成は、ガレオーネスの場合金銀二二〇〇―二三〇〇

万エキュに対して他の植民地物産八九万エキュ、フロータの場合金銀一一〇〇—一二〇〇万エキュに対して他の植民地物産一五七万エキュとなっており、この時期においても貴金属の比重は圧倒的であった。[32] そして同じ覚書によると、この帰り荷のうち各国商人の取り分（母国への送付分）は第八表の通りであり、フランスがここでも首位を占めるが、ジェノヴァ、オランダ両国との差はさきのアメリカ向け輸出額の場合ほど大きくはない。また、カディス駐在領事カタランの報告にもとづくジラールの分析によると、一六七〇—八六年にフランス商人は、ガレオーネスまたはフロータがもたらした貴金属のおおむね一二—一六%を受け取って母国へ送付しており、その額は年平均三〇〇万ペソ（九〇〇万リーヴル）に達した。[33] ところでフランス商人は通例、カディスで受け取った貴金属の一部をオランダ船によって銀の高価なアムステルダムへ送り、そこでパリ宛の為替を受け取っていたのであり、[34] したがってカディスにおける彼らの実際の金銀獲得額が右の数字を上まわるものであったことは確実である。たしかにフランス＝スペイン間の戦争のためにフランス商品の積み込みが少量にとどまった一六七八年や一六九六年のフロータの場合には、その帰港時におけるフランス商人の金銀取得額も当然少なかったが、[35] そうしたケースをのぞくならば、フランス商人がこの時期に諸外国の商人の中で、スペイン本国へもたらされる貴金属の最も大きな部分を獲得していたことは、まず間違いのないところであろう。

第8表　アメリカからの帰り荷に占める各国商人の取り分（1691年）

	千リーヴル
フランス	13,000〜14,000
ジェノヴァ	11,000〜12,000
オランダ	10,000
イギリス	6,000〜 7,000
フランドル	6,000
ハンブルク	4,000

（資料）Mémoire de 1691, p. 509.

① Antoyne de Montchrétien, *Traicté de l'aconomie politique*, éd. par Th. Funck-Brentano, 1889, p. 66. ここでモンクレティアンが「フランスの主要な鉱山」と呼んでいる輸出商品は小麦・ぶどう酒・塩・毛織物・麻織物の五つである。*Ibid.*, p. 239.

② J. Eon, *Le commerce honorable*, 1646, p. 78.

③ *Ibid.*, p. 79.

④ *Ibid.*, p. 27.

⑤ Bibl. Nat., Mss. Cinq Cents Colbert, 203, fol. 165. Cf. Girard, *op. cit.*, pp. 338–339.

⑥ *Ibid.*, p. 349.

⑦ 一七世紀におけるフランスのスペイン向け麻織物輸出額について現在われわれが知りうるところはきわめて少ないが、一六四〇年にスペインの著作家ペリセルはこれを年間三五〇万ペソ（七〇〇—九〇〇万リーヴル）と見積もっており、また後述の一六八六年のパトゥーレの

覚書にはカディス港のみについて年間約六〇〇万リーヴルという数字が見出される。Girard, *op. cit.*, p. 349.

⑧ *Ibid.*, p. 339.

⑨ Sabbe, *op. cit.*, pp. 25–28.

⑩ *Ibid.*, p. 27. D・セルラも一七世紀前半にはフランドルの亜麻織物がスペイン帝国で特権的地位を占めたとみる。D. Sella, European Industries 1500–1700, C. M. Cipolla, ed., *The Fontana Economic History of Europe*, Vol. 2, 1977, p. 363.

⑪ Girard, *op. cit.*, pp. 57–61.

⑫ Eon, *op. cit.*, pp. 74–79; Girard, *op. cit.*, pp. 61–68.

⑬ Girard, *op. cit.*, pp. 77–78, 508–509; Lynch, *op. cit.*, Vol. 2, pp. 169–170.

⑭ *Girard, op. cit.*, pp. 110, 509. テイラーによると一六三五年から四〇年代半ばまではイギリス船がフランス商品のスペインへの輸送に支配的役割を演じた。この時期はイギリス海運業の一大繁栄期であり、ドーヴァー港からはフランス商品のほかフランドル、ドイツなどの織維製品がスペインおよび地中海市場へ向けて大量に輸出されていた。しかし一六四八年の講和の後は、オランダ船がフランス＝スペイン間の商品輸送の主たる担い手となる。H. Taylor, Trade, Neutrality, and the "English Road", 1630–1648, *Econ. Hist. Rev.*, 2nd ser., XXV, 1972 (2), pp. 249–260. また、川北稔『『一七世紀の全般的危機』とイギリス経済』『西洋史学』一一一号、一九七八年、九―一〇頁、参照。

⑮ Girard, *op. cit.*, pp. 87, 110.

⑯ *Ibid.*, p. 110.

⑰ *Ibid.*, pp. 94–109. なお、名誉領事（特別判事）Juez conservador は自国民同士の訴訟、また自国民とスペイン人および他の外国人との間の訴訟を裁くために、貿易港など主要都市に置かれた。

⑱ *Ibid.*, p. 129.

⑲ *Ibid.*, p. 206.

⑳ *Ibid.*, pp. 225–226. ここで一六六七年のイギリス＝スペイン通商条約について一言しておきたい。わが国では、この通商条約をもってスペイン領アメリカにおけるイギリスの勝利への決定的な一歩とみる見方が広く広なわれているが（大塚、前掲書、一〇五―一〇六頁、石坂昭雄他『西洋経済史』、有斐閣、一九七六年、一一六頁参照）、しかしイギリスがこの条約によって獲得した諸特権は、スペインにおけるフランスの諸特権を上まわるものではなかったことに注意すべきである。イギリスがこの条約によって獲得した名誉領事の選任権を、フランスは一六七一年以降スペイン政府によって事実上承認されるにいたった。Girard, *op. cit.*, pp. 149–158. また船舶の臨検問題についても、本文中に記した通り、一六七〇年以降英仏両国商人の法的地位の間に差異はなかった。にもかかわらず、スペイン当局がその後もフランス船の臨検をくり返し強行したことは、フランス船による非合法貿易がカディス湾内で猛威を振っていたことを証明するものではなかろうか。

㉑ *Ibid.*, pp. 133–134, 219 sqq.

㉒ この覚書については、Cf. Kamen, *op. cit.*, pp. 117, 147 n. 22.

㉓ Mémoire de Catalan, fol. 53. Cf. Kamen, *op. cit.*, p. 117.

㉔ Mémoire de Catalan, fol. 53.

㉕ Bibl. Nat., Mss Mélanges Colbert, 151 bis, fol. 604, cit. Girard, *op. cit.*, p. 339. セルラは一六五〇―八〇年にはオランダ、シュレージエンのリンネルがスペインへ大量に輸入されたと述べ、フランスの麻織物が再び優位を占めるのは一六八〇年以降のこととみているが（Sella, *op. cit.*, p. 363）、上掲の二史料によるかぎり、このような見解にはにわかに賛同できない。

㉖ Mémoire de Patoulet, fol. 203-208. Cf. Girard, *op. cit.*, pp. 361-362.

㉗ Everaert, *op. cit.*, p. 893. エフェラールトは在カディスのブースマール商会の事例にもとづいて、フランドルからの輸入商品の中では麻織物がレースとほぼ同じ割合を占めたとみている。

㉘ Mémoire touchant le commerce des Indes occidentales par Cadix de 1691, publié dans H. Sée, Documents sur le commerce de Cadix (1691-1752), *Revue d'hist. des colonies fr.*, t. XIV, 1926, pp. 505-506, 511-512.

㉙ Girard, *op. cit.*, pp. 446, 453.

㉚ Mémoire de 1691, pp. 489-490, 519. イギリスによるスペイン植民地への直接貿易はカリブ海のジャマイカ島を、オランダによるそれは同じくキュラソー島を、主要な基地として行なわれた。一六九一年の覚書は、フランスがこのようなスペイン領への密貿易のための基地を、カリブ海において獲得すべきことを主張している。

㉛ Chaunu, *op. cit.*, t. VI$_1$, pp. 462-463, Tableau 217 A.

㉜ Mémoire de 1691, pp. 505-506. ガルシーア＝フエンテスは一六五〇―一七〇〇年において、貴金属は総輸入額の八五―九〇％を占めたとみる。García Fuentes *op. cit.*, p. 384.

㉝ Girard, *op. cit.*, p. 454.

㉞ *Ibid.*, p. 453.

㉟ *Ibid.*, pp. 448, 453.

おわりに

以上きわめて大づかみながら、一六、七世紀のスペイン植民地貿易の展開過程においてフランスがいかなる役割を演じたかを、植民地向け織維製品の供給に占めるフランスのシェアー如何に焦点をしぼりつつ考察してきた。その結果、一六世紀後半―一七世紀初頭のスペイン植民地貿易の飛躍的成長期においてフランスの対スペイン貿易、とりわけ麻織物の輸出がめざましい伸びを示したこと、また一六一〇年頃から六〇年頃にいたるスペイン植民地貿易の収縮期においては、スペイン政府の輸入制限策や仏西間の長期にわたる戦争の影響もあって、フランスのスペイン向け輸出は大幅な減少をよぎなくされたとしても、一六六〇年以降のスペイン植民地貿易の回復期においては、フランスが再びアメリカ植民地向け織維製品の最大の供給者となったこと、を確認しえたのではないかと考える。

さてこのような本稿の分析結果にもし誤まりないとするならば、スペインの新世界貿易に関するわが国での通説的理解はつぎの二点で改められねばならないであろう。第一に、通説によればスペイン植民地向け輸出の基軸商品は毛織物とさ

れるが、一七世紀のカディス貿易について論じた諸史料は、スペイン領アメリカで最も大量に消費された工業製品が毛織物ではなく麻織物であったことを一致して指摘しており、したがって毛織物よりもむしろ麻織物をこそスペイン植民地向け輸出の基軸商品とみなすべきではないか、あるいは少なくとも麻織物に対して毛織物と同等の基軸的意義を認めるべきではないか、と考えられる。第二に、通説によればフランスは一七世紀中葉まで、輸出商品としての毛織物を欠いていたがゆえに、スペイン領アメリカ市場においてイギリス・オランダ両国に比肩しうる地位を占めることができなかったとされるのであるが、しかし本稿第一章で述べたように、フランス商人はすでに一六世紀後半よりアンダルシーア諸港に進出しつつ、麻織物取引を強力に展開していたのであり、フランスがこのスペイン植民地貿易への参加という点で英蘭両国に立ち遅れたとはみなしがたいのである。もちろんスペイン領植民地との貿易はスペイン国籍をもつ商人にしか許されていなかったが、フランス商人はスペインにおける他の諸外国の商人と同様に、スペイン人を自己の商品の名義上の所有者とすることによって実質上みずからの計算でスペイン領植民地との貿易を行ない、[1] 新世界の金銀の大きな分け前にあずかることができたのである。

それではフランスは、一八世紀に入ったのちもスペイン植民地貿易において優越せる地位を占めつづけたのであろうか。筆者は別稿において、少なくともスペイン本国からのアメリカ植民地向け輸出にかんするかぎり、フランスが一七五〇年代半ばまで圧倒的優位を保ちつづけたことを確認した。[2] しかしこのいわば正規のスペイン領アメリカ貿易と並んで、すでに一七世紀末以来英蘭両国によるスペイン領植民地への直接貿易がかなりの発展をとげており、フランスもまた一八世紀初頭のスペイン継承戦争の時期にはこの貿易分野に急激な進出を示すにいたったのである。[3] それゆえ、一八世紀のスペイン領アメリカ貿易に占めるフランスの相対的地位を確定するためには、英仏蘭三国によるスペイン領アメリカへの直接貿易の展開規模を大づかみにでも明らかにすることが不可欠である。この点を筆者のつぎの課題としたい。

① 本稿三八頁、注⑥参照。

② 前掲拙稿、二一―二七頁。

③ フランスは一七世紀末葉から一七二〇年頃まで、ブルターニュの海港サン＝マロの商人を中心に、南米太平洋岸のスペイン人植民地に対する直接＝密貿易を大規模に展開した。E・W・ダールグレンの研究によると、この「南海貿易」によって一七〇一―二〇年の間に少なくとも二億リーヴル（五七〇〇万ピアストル）にのぼる貴金属がフランスへもたらされたという。Dahlgren, Voyages français à destination de la Mer du Sud avant Bougainville (1695-1749), *Nouvelles archives des missions scientifiques*, t. XIV, 1907, pp. 431-432; J. Delumeau, *Le mouvement du port de Saint-Malo, 1681-1721, Bilan statistique*, 1966, p. XIII. なおモリノーは、同じ一七〇一―二〇年におけるスペイン領アメリカ産貴金属のヨーロッパへの輸入量を、スペインによるもの一億四一二〇万ピアストル、その他の国々によるもの八一八〇万ピアストルと見積もっている。Morineau, Critique, p. 83.

〔付記〕 本稿の作成にあたり貴重な文献を拝借させていただいた川口博氏、木崎喜代治氏に謝意を表する。

（京都大学文学部助教授　　）

The finance of province government in the late period of the *Qing* 清 dynasty ——the province of Hubei 湖北——

by

Akinobu Kuroda

In the late period of the *Qing* dynasty, the indemnities which were paid two times and the reform of the power structure, chiefly the foundation of the new armies, forced each province 省 government to increase the finance rapidly. The province govrenment of *Hubei*, which promoted this reform actively, dealt with the increasing expenses by adding the income other than taxes, for example margin profits from striking copper coins, to the system of taxation imposed mainly on the circulation: a consumption tax, a toll and so forth. So its finance became relatively sound. But, for that reason, it was obliged to bear too heavy a burden in the military expansion. This too heavy burden hindered the administrative activities, and resulted in the conflict of the policy between the province government of *Hubei* and the central government of *Qing*.

Behind the relative superiority of the finance, we must remark the development of the economy of *Hankou* 漢口 in which the Mint Bureau 官銭局 played a principal part and which was much stimulated by entering the world market.

Le trafic hispano-américain et la France aux XVIe et XVIIe siècles

par

Haruhiko Hattori

Du XVIe au XVIIIe siècle, la genèse et le développement du trafic hispano-américain ouvrirent aux industries textiles européennes un gr-

and débouché. Ceci est déjà bien connu, mais il nous reste à préciser quel article était le plus important dans les exportations de l'Espagne vers l'Amérique et quel pays était le plus gros fournisseur de l'Amérique espagnole.

Pour la première question, les documents que j'ai pu utiliser, sont unanimes à placer les toiles (tissus de lin et de chanvre) au premier rang parmi les exportations textiles espagnoles, bien que les historiens japonais attachent généralement plus d'importance aux étoffes de laine.

Pour la seconde question, nos conclusions sont suivantes:

1) Dans la seconde moitié du XVIe siècle, après la paix avec l'Espagne de 1559, la France, profitant de la décadence de la production et de l'exportation des toiles des Pays-Bas, augmenta sensiblement ses exportations des toiles vers l'Espagne et l'Amérique. Il est presque certain qu'au début du XVIIe siècle, à Séville et Cadix, points de départ pour l'Amérique, l'activité commerciale des français était plus intense que celle des anglais ou des hollandais.

2) Pendant la dépression du trafic hispano-américain de 1610 à 1660, à cause des hostilités entre l'Espagne et la France, et de la concurrence accrue des toiles flamandes, les exportations françaises vers l'Espagne et l'Amérique subit une diminution sérieuse, mais à partir de 1660, avec la nouvelle expansion du trafic hispano-américain, la France redevint le premier fournisseur des produits textiles de l'Amérique espagnole et tenait cette place au moins juspu' à la fin du XVIIe siècle.

The new armies of Ma'mūn and Mu'taṣim

by

Fukuzo Amabe

The armies of the early 'Abbāsids consisted of the revolutionary army from Khurāsān which brought the 'Abbāsids to the caliphate and of the ex-Umayyad armies. The Khurāsāni army itself consisted of many small corps under Arab or mawālī commanders who recruited them from their clans or relatives. Most of them were from Marw, Marwarrūdh, Abīward, Nasā, and Gurgān. Many highest leaders were Arab Khuzā'ites from the villages of Marw. After the successful revolution the larger part of the Khurāsāni army settled in Baghdād.